

戦後直後の台湾における YMCA 運動

—台北基督教青年会の設立（1945 年）をめぐる—

高 井 ヘラー 由 紀

はじめに：論文の主眼

本稿は、1945 年より 1949 年前後までの台湾における YMCA 運動の展開を明らかにする作業を通して、近代東アジアにおける YMCA 運動のダイナミズムの一端を考察しようとするものである。

戦前の東アジアにおける YMCA 運動は、中国、韓国、台湾のいずれにおいても、都市部の知識青年層を中心的な担い手とし、アジア唯一の「帝国」日本の首都東京をハブとしつつ、民族自決主義を吸い上げる形で展開されたことが、共通の傾向として認められる。東アジアにおいて真っ先に近代化を成し遂げた日本において、また日本による植民地支配や帝国主義的侵略の対象となった朝鮮半島、中国、台湾においても、柔軟な「パラチャーチ」運動体である YMCA は、近代化の急先鋒である親キリスト教青年層を取り込み、現地側の自律性への要求を吸い上げる形で展開していった⁽¹⁾。とりわけ、日本による植民地統治あるいは占領に先立って現地キリスト教徒による YMCA 設立が実現した中国および朝鮮半島では、YMCA は広くナショナリズム運動を担う知識層の青年を惹き付け、そのような人材を輩出し、またその受け皿となっていた⁽²⁾。それに対して台湾では、日本による植民地統治開始以前に現地

人主体のYMCA運動が存在しなかったこともあり、日本統治期を通じて台湾人中心のYMCA運動は極めて限定された形でしか展開を見なかった。

本稿では、そのような戦前の台湾人YMCA運動の特色を確認した上で、日本の敗戦に伴う「光復」と中華民国への台湾「返還」、そして国民政府が台北へ遷都するプロセスの中で、1945年から1949年頃までの台湾におけるYMCA運動がどのように展開していったのかを中心に検討することを目的としている。戦前のYMCA運動が担っていた自律的青年キリスト教運動への希求は、最も直接的には戦後直後の台北YMCAの設立という形で実現したが、同時にYMCA運動は新たに浮上した諸方面の問題への対応に迫られつつ、台湾独自の展開を見ることとなる。本稿では、中国大陆出身キリスト教徒との関係、中華基督教青年会への加入問題、台湾基督長老教会青年会団契（TKC）の創設、また中華人民共和国発足後の世界YMCAにおける台北YMCAの立ち位置の問題、などに焦点を絞りながら、戦後直後の台湾人YMCA運動の展開における特殊性の問題に迫りたい。

戦前の台湾人YMCA運動

以下、拙稿「日本植民地統治期の台湾YMCA運動史論」（2012年）^③，に依拠しつつ、戦前の台湾において展開された台湾人主体のYMCA運動の特色を改めて確認しておきたい。

第一に、戦前の台湾人YMCA運動は、日本人中心の「台湾YMCA」が1896年以来存在していたため、独自の展開をすることが困難な状況にあった。もとより、植民地統治下の台湾では結社の自由は極めて制限されており、台湾人が新たなYMCAを組織しようとする動きが危険視されるであろうことは明白であった。とりわけ議会設置請願運動以降の

政治的状況においては、通常の都市 YMCA の設立は不可能に近かったと考えられる。台湾人 YMCA を設立する難しさはいわゆる「学 Y」（学生 YMCA）でも同様であった。台北市内の高等学校には教会子弟を含む台湾人子弟が多くいたが、学校単位で台湾人のみの学 Y を組織することはあり得ず、結果的に「台北台湾人学生 YMCA」のように、各学校を離れて活動する形態をとっていた。

第二に、その結果として、戦前の台湾人 YMCA 運動は YMCA 本来の特色であるパラチャーチ的形態にまで至らず、むしろ既存の台湾長老教会（事実上、唯一の台湾プロテスタント教会）を拠点として、あるいはその支援を受けて展開される傾向にあった。「YMCA」の名称を持つ台湾人キリスト教青年グループは、1920 年代および 1930 年代、全島および日本内地合わせて 30 以上誕生したが、その多くが特定の教会を活動拠点とする「教会青年会」ともいえる形態をとっていた。これだけの動きがあったこと自体、台湾人キリスト教青年が、自律的に参与できるところの YMCA 運動を希求していたことを明確に示している。このような青年キリスト教運動は、教会の体制を相対化するような性格を有していた側面もあり、台湾長老教会の積極的な支持を受けたわけではない。しかし、日本統治開始以前より台湾に存在していた長老教会は、西洋ミSSIONの後ろ盾もあって、台湾人が自律的に活動できる数少ない「聖域」であった。その意味で台湾人キリスト教青年が教会を YMCA 活動の拠点としたことには、必然的な理由があった。

第三に、以上の制約にもかかわらず、戦前の YMCA 運動はパラチャーチ的な特色を有してもいた。もっとも顕著な動きとして、1932 年、台湾全島に展開していたキリスト教青年運動を正式に「YMCA」の名の下に連携させようと、台南を拠点とする「台湾基督教青年会連盟」（以下、連盟）が設立されたことが挙げられる。この連盟は 1940 年に「台湾基督教会青年会連盟」と改称しているが、少なくともその時点までは

明確に、世界的な YMCA 運動と連動するパラチャーチ運動を志向していた。それは例えば、連盟発行の会報誌『連盟報』において、「青年会 (Y.M.C.A.)」とは何かという問いに対し、それは教会と相互に助け合うところの、しかし教会とは別個の平信徒の自治組織である、と論じられているところに示されている⁽⁴⁾。また、当時作られたと思われる連盟の旗には YMCA の三角シンボルが中央に据えられており、何よりも明らかに連盟の自己認識を示している（【写真1】参照）。

台南を拠点とする連盟の動きに加え、連盟に加入していた「台北 YMCA」の存在も、教会の枠組みを超えた動きとして挙げられる。これは個人宅を拠点とし、複数の教会関係者が関与していたという意味において、おそらく戦前台湾の各 YMCA グループ中、もっとも明確にパラチャーチ的な性格を有していたものであったと考えられる。この台北 YMCA と連盟の流れとが、戦後の台北 YMCA 設立に最も直接的に繋がっていくのである。

最後に、以上の戦前の台湾人 YMCA 運動はことごとく世界 YMCA



【写真1 台湾基督教青年会連盟の旗（台湾神学院史料中心保管）】
「YMCA」の名称および三角形のシンボルが中央に据えられている。
（筆者撮影）

の動きから取り残されていたことを指摘しなくてはならない。北米の国際 YMCA 委員会は、台湾キリスト教青年による自律的運動へのニーズを顧みる意志を全く有しておらず、台湾各地に設立された YMCA グループ、学生 YMCA グループ、また台湾基督教青年会連盟のいずれも、結果的には非公認の自主組織、すなわち「自称 YMCA」にとどまった。

中国や韓国における YMCA 運動がナショナリズムの受け皿になり、ダイナミックな展開を遂げたこととは対照的に、台湾の場合には、運動そのものはナショナリスティックな契機を有していたが、植民地主義および帝国主義の構造に阻まれて十分に組織的展開がなされなかった、とまとめられよう⁽⁵⁾。

「台北 YMCA」の設立（1945 年 10 月）⁽⁶⁾

こうした自律的 YMCA への希求を引き継ぐ形で、1945 年 8 月の日本敗戦に伴い、台北ではいち早く「台北基督教青年会（台北 YMCA）」が組織された⁽⁷⁾。22 名の発起人に名前を連ねたのは、李超然、李延旭、李順天、李達莊、李雅各、杜聰明、吳永華、吳清鑑、林茂生、林和引、洪明輝、陳溪圳、陳泗治、張鴻図、張逢昌、張崑遠、鄭進丁、鄭蒼國、顏春和、潘文羅、廖述寅、藍蔭鼎、である。この大半は戦前の台湾人 YMCA 運動および日本人中心の台湾 YMCA に参与していた者であったが、特に戦後直後の台北 YMCA を中心的に担ったのは、戦前の「台北 YMCA」副委員長であった李超然（1910-1992）⁽⁸⁾ および戦前の「台湾基督教青年会連盟」委員であった顏春和（1906- 没年不詳）⁽⁹⁾ であった⁽¹⁰⁾。『台北基督教青年会成立十周年』（1955 年）によれば、10 月 5 日に会員募集広告が起草されると 88 名の青年が即座に加入し、10 月 10 日の大稻埕長老教会における発会式には 250 名が参列している。ここで理事長に選ばれたのが、林茂生（1887-1947）である。林茂生は台

湾人として初めて東京帝国大学学位および米国の博士号を取得した台湾きってのインテリであるのみならず、戦前の台南長老教中学校を「台湾人の学校」にするために尽力するなど、教育の現場を足場として植民地主義と鋭く対峙した人物である⁽¹¹⁾。戦後間もなく台湾大学の教授に就任し、台湾各界を牽引する指導者になることを囑望され、キリスト教界においても台北 YMCA 理事長のみならず、淡水中学校および淡水高等女学校(1947年に合併して淡江中学と改称)の理事長も引き受けている。1917年という早い時期に台湾人キリスト教青年のための夏季学校を組織した経験をも有し、台湾人主体の青年キリスト教運動の必要性を深く認識していたものと考えられる。一方、実際の活動の要となる「幹事」(主事)には、日本 YMCA 同盟主事および台湾 YMCA の経験を有する林和引(生没年不詳)に正式な依頼がなされた⁽¹²⁾。

ところで1945年10月発会当時の台北 YMCA は、未だどこからも認知されていない任意団体であった。戦後の混乱期でもあり、全国協会(この時点では上海に拠点を置く中華基督教青年会)および世界 YMCA 同盟との連絡は未だになく、正式に法人としての登記もなされていなかったものと思われる⁽¹³⁾。その主な業務は、在台日本人の引き揚げや在外台湾人の帰国の世話であり、仮事務所として李超然私宅や台湾神学院校舎を使用していた。1945年末には資金調達のために音楽会をも開催している⁽¹⁴⁾。

しかし、翌1946年4月、林和引は商用の多忙を理由に主事を辞任、林に代わってやはり日本 YMCA 同盟主事の経験を有する鍾啓安(1916-1992)が主事に就任、以降、会の活動は軌道に乗り始め、鍾は名実共に台北 YMCA の顔となっていく⁽¹⁵⁾。活動を軌道に乗せた大きな要因となったのは、会館の確保であった。『台北市中華基督教青年会40年史』(以下『40年史』)における鍾自身の記述によれば、鍾は元台湾 YMCA 主事の近森一貫と元来より親しい仲であったが、戦前に台湾 YMCA の拠

点であった旧明石町教会（日本組合基督教会台北教会、現台北市許昌街）を日本人の引き揚げ事業の事務所として使用していた近森が、鍾にこの場所を接収して台北 YMCA の活動に使うと述べたという。近森の忠告に従い、4月1日に台北 YMCA 本部を台湾神学院より旧明石町教会堂に移転、翌1947年7月に台北市政府教育局に同教会堂建築物の借用を申請した⁽¹⁶⁾。光復後に「日産」となった戦前の在台日本人教会が、台湾の教会やキリスト教団体に委譲されたケースの一つである⁽¹⁷⁾。

旧明石町教会の建物は空襲による痛みが激しかったものの、修繕を重ねて何とか使用できる状態にあった。この建物を会館として使用できるようになった台北 YMCA では、早速、「英語補習班」、「国語〔標準中国語〕補習班」、「台語〔閩南語〕補習班」、「婦女生活科学研究会」、「学生青年会」などの YMCA らしい活動を開始することとなった⁽¹⁸⁾。ここで特記されるべきは、大陸から派遣された軍関係者および官員でキリスト教徒の者のために1946年に開始された「国語礼拝」である（【写真2】参照）。これは厳密には台北 YMCA による活動ではなく、「国語」すなわち標準中国語による礼拝の場所を緊急に必要としていた大陸出身のキ



【写真2 一周年を迎えた国語礼拝の集合写真】

（羽鳥直之氏提供）

リスト教徒のために、台北 YMCA の会館において礼拝ができるための便宜を図ったということであった。発起人として準備に当たったのは、李超然および福建省泉州出身の台北県警察局長、黄麗川であった⁽¹⁹⁾。この「国語礼拝」は1946年4月15日イースターに正式に開始され、たちまち会堂満員の信者が集まるようになったが、後述するように台北 YMCA の当会館における存続を脅かすこととなっていくのである。

こうして台北 YMCA は、戦後の政治的経済的混乱期に、戦前からの自律的 YMCA 運動への希求を引き継ぎつつ、活動の拠点となる会館を確保し、活動を現場で支える正式な主事を得ることによって、ごく早期からその活動を順調に軌道に乗せていった。対して、戦前台湾基督教青年会連盟の設立拠点になった台南は、後述する台湾長老教会主導の青年会運動である「TKC」の牽引役となったこともあって、1950年代半ばまでいわゆるパラチャーチとしての YMCA は設立されていない。その意味において、1950年代前半までは、台北 YMCA が台湾全島を代表する YMCA 組織だったといえる。

台湾各地における「YMCA」運動の再開

以上のように、台北 YMCA は戦後台湾における YMCA 運動の要になっていったのであるが、1949年以前の台湾では、「YMCA」の名称のもとに青年キリスト教運動または教会青年会を再組織しようとする個別の動きが台北以外の各地でも見られた。台湾基督長老教会発行『教会公報 (Kàu-hōe Kong-pò)』記事に言及された範囲でも、台南県塩水(鹽水) YMCA、台南太平境教会青年会、台中柳原教会 YMCA などに関する記事が登場しており、ほかにも戦前に「YMCA」が組織された地域の多くで、おそらく何らかの形でキリスト教青年運動再建への気運が高まっていたことは間違いないであろう。

塩水 YMCA は 1932 年 6 月 19 日に設立され、台湾基督教青年会連盟発会時の加入団体であったが、1940 年頃より休会しており、1946 年 11 月 3 日、聖日礼拝後の午後、塩水教会にて戦後第一回目の総会を開催している⁽²⁰⁾。戦前会長をつとめていた塩水教会員の莊石斌が司会、24 名が出席し、讃美歌斉唱、聖書朗読の後、塩水教会主任牧師の楊招義が臨時議長となって 7 名の役員（莊石斌、孫銀案、范乾舜、張榮宗、陳碧鳳、周茂己、顏捷冠）を選出、再び讃美歌斉唱、牧師による祝祷で閉会した。閉会後に開催された役員会では、莊石斌が主任役員に選出されるとともに、総務部、宗教部、教育部、体育部、社会部それぞれの担当を決定、さらに楊招義を顧問に依頼した。このように、役員担当部門の多様さを見ても、この時点では塩水 YMCA が単なる教会青年会ではなく、社会活動にも積極的に従事する青年キリスト教運動を構想していたことがわかる。しかしながら、役員に選任された 7 名全員が塩水教会関係者であることから⁽²¹⁾、塩水 YMCA がほかの教会関係者をも含むパラチャーチ的な都市 YMCA としての機能を果たしていた可能性は、少なくともこの時点では極めて低いといえよう。

一方、同じく『教会公報』記事によると、約半年後の 1947 年 4 月には、南部を代表する太平境教会でも青年会総会が開かれ、会長に蘇銅鐘、副会長に洪南海、および役員 10 名が選出されたことが報告されている⁽²²⁾。「YMCA」という呼称は用いられていないものの、式辞において「霊・知・体」の精神や YMCA 創設者ジョージ・ウィリアムズへの言及があることから、やはり活動の理想型として YMCA が明確に意識されている。

このように、戦前にパラチャーチとしての YMCA 活動がほとんどなされていなかった台湾では、戦後も呼称に「YMCA」を用いたり YMCA 的な活動を志向する青年会が再開されてはいたものの、その大半は教会青年会と明確な区別を持たないものであった。その背後には、戦前から続く、台湾長老教会のパラチャーチ運動に対する警戒感や躊躇

があったと考えられる。加えて戦時期に「日本基督教台湾教団」に加入させられた台湾長老教会にとって、戦後直後は「日本基督教台湾教団」の解体から始まる教会再建の時期であった。そのプロセスの中で、教会青年が教会外で活動することを支援するよりは、台湾長老教会内で連結して将来の教会を担う人材を育成しようとしたのは無理からぬことであった。

このプロセスを良く示すケースが、台中柳原教会である⁽²³⁾。柳原教会 80 年史の記述によれば、戦前に柳原教会青年会が設立されたのは 1932 年 11 月 5 日であり、これは戦前の台湾人 YMCA 運動の流れに位置づけられるものである。人口約 5 万人の台中市内で唯一青年会を有していた柳原教会は非常な活気に溢れ、青年会の組織は宗教、知育、体育、音楽、交わり、財務、庶務の 7 組に分かれ、会員が自由に参加する形態をとっていた。同時に青年たちは聖歌隊、訪問隊、伝道隊、日曜学校教師などの教会奉仕にも積極的に従事していたという。また、台湾基督教青年会連盟の開催する夏季学校にもメンバーを送り込み、戦前に 7 回開催された全島規模の夏季学校の会場にもなっている。戦時中も依然として活発に活動を継続し、1943 年には芸能発表会への参加、学生部の新設、彰化や豊原教会青年を招いての卓球大会などを行っていた。

問題なのは、柳原教会 80 年史の記述において、戦前の夏季学校を開催した台湾基督教青年会連盟が「長老教会青年連盟」とされていることである。明確にパラチャーチとして構想されていた連盟が、戦後の立場から長老教会主導の青年会運動だったとの書き替えられている点については、修正が必要であろう。戦後柳原教会に生まれた青年会の詳細は不明であるが、1946 年から 1947 年にかけて、医師の楊天和（戦前に柳原教会執事歴任⁽²⁴⁾）が『教会公報』紙上で「台中柳町^{ママ}〔原〕 Y.M.C.A. 霊修部長」「台中 Y.M.C.A. 会長」などと署名していることから⁽²⁵⁾、「YMCA」の名称を用い、YMCA 的な活動を志向していたものと思わ

れる。80 年史によれば、戦後の YMCA が台湾長老教会の「指示」によって「柳原教会青年団契（柳原 TKC）」と改称したのは、台湾長老教会主導の青年活動「Tâi-oân Ki-tok Tiúⁿ-ló Kàu-hōe Chheng-Liân Thôan-Khè（台湾基督長老教会青年団契，以下 TKC）」が正式に創設された 1949 年であった⁽²⁶⁾。

このようにして戦後直後の台湾各地に見られた「青年会（YMCA）」運動は、戦前の YMCA 運動の余韻の中で YMCA をイメージしながら「再開」されたものであったが、パラチャーチとして設立された台北 YMCA ではなく、むしろ長老教会主導の「TKC」の動きに急速に吸収されていくこととなったのである。そこで決定的な意味を持ったのが、1948 年に開催された全島のキリスト教青年を対象とした夏季学校であった。

戦後第一回夏季学校（「夏令会」）の開催（1948 年 7 月）⁽²⁷⁾

1948 年 7 月 15 日から 22 日までの一週間にわたって淡水中学校および高等女学校を会場として開催された全島規模の青年夏季学校（「夏令会」）は、事実上、TKC を生み出した出来事である。1200 名とも 1500 名とも言われる青年が参加したとされる、台湾では未曾有の規模となったこのキリスト教青年夏季学校は、鍾啓安および英国から帰国して間もない黄彰輝（1914-88）の両者が中心になって企画したものであった。

台南長老教中学のチャプレンを永くつとめた牧師の黄侯命を父親に持つ黄彰輝は、同中学に学んだ後、台北高等学校および東京帝国大学を経て英国ケンブリッジ大学ウェストミンスター学寮で神学を修め、英国で終戦を迎えた後、二・二八事件発生から数ヶ月後の 1947 年 9 月に台湾への帰郷を果たした⁽²⁸⁾。台湾の青年とりわけ学生層を対象とするキリスト教事業に強い熱意を有していた黄彰輝は、基隆到着時に出迎えた妹

婿の鍾啓安と初めて出会い、両者はこの点において大いに意気投合することになる。黄彰輝は、英国滞在中の1939年、「日本代表」の唯一の台湾人として第一回世界基督教青年大会（アムステルダム大会）に参加を許され、加えて1947年の帰台途上、オスローで開催された第二回世界基督教青年大会に「台湾長老教会代表」として参加する機会を得ており、同様の1500名規模の青年キリスト教大会を台湾でも開催したいと熱望していた。この考えに鍾啓安は飛びつき、鍾の準備と手配によって翌1948年夏の開催が可能になったのである⁽²⁹⁾。

夏季学校終了後に『教会公報』に掲載された鍾啓安の報告によれば、南北教会教育局と台北YMCAの代表が台南に集まって第1回目の準備委員会を開いたのは、開催三ヶ月前の4月14日である。その後準備会が5回にわたって開かれ、会期、プログラム、予算、人数、講師、リーダーなどが決定された。開催の目的は、第一に台湾キリスト教青年の視野を世界に向けて広げることであり、第二に青年キリスト教運動における青年自身のリーダーシップを強化することであった。後者の目的に従い、夏季学校では朝晩の礼拝における司会と講師をのぞき、原則として青年がリーダーをつとめることとなった。当初想定した人数は600名であったが、開催日までに申し込みは1200名を超え、それに対して選ばれた40名の青年がリーダーとして対応することになった。

開催日前日に一泊のリーダー準備会が行われた後、7月14日に参加者が続々と淡水の会場に到着すると、申し込みをしていない参加者が多数あったこともあり、主催者側は大混乱に陥った。とはいえ、夜8時の開会礼拝に1200名の青年が集い、一斉に讃美歌「聖なる、聖なる、聖なるかな」を斉唱すると、壇上に貼ってある主題「イエスは主である」の視覚効果と相まって、講堂は「形容し難い」雰囲気包まれたという。その後、毎日行われる朝晩の礼拝、講師による講演、グループごとの聖書研究や討論、食事、音楽などの全てが、参加した青年たちに深い印象

を残す共同体験となっていた⁽³⁰⁾。

自身参加者であった張瑞雄は、戦後、特に二・二八事件後の台湾で、この夏季学校が青年の心をいかに惹き付けたかについて、以下のように記している。

青年たちは全く人生の方向を学ぶ書物を持たず、本屋にある書物は知的要求を満足させるものがなく、外からの刺激もなく、過去から未来へとつなぐ理念もなく、霊性を与えてくれるものもなかった。しかし、どこから伝わったのか、どの教会でもこのような青年キャンプがあることが知らされていた。多くの青少年が一生のうちで初めて汽車に乗って台北に来、一五〇〇人の青年と一緒に講演を聞き、一緒に食事をし、淡水線の汽車に一杯になって台北に行き、台北の新公園で特別の礼拝を守った。これは心に大きな衝撃となり、その力は非常に深いものがあつた。

一五〇〇人の青年たちはその後、教会の指導者になった⁽³¹⁾。

ここには日本による植民地支配から「解放」されたものの、内外において低迷する台湾に置かれた青年たちの不安定な心境と、夏季学校にこぞって参加した教会青年に対して、この共同体験が与えたインパクトの大きさが示されている。こうして全島から参加した青年たちの間には、キリスト教という媒介を通して横断的なネットワークが生まれ、それが後の台湾長老教会の中で重要なファクターとなっていたことは想像にかたくない。

ここで特に明記しておきたいのは、黄彰輝の存在が青年たちにもたらしたインパクトである。この夏季学校には三名の講師が招かれていたが、うち二名は上海 YMCA および同 YWCA からの講師であり⁽³²⁾、台湾出身者は黄彰輝のみであった。黄彰輝は台湾の俊英であるのみならず、未だ 30 代前半の若さながら世界的視野と台湾教会の将来へのビ

ジョンを有していた。その存在は台湾の教会青年にとっては憧れであり、また世界への入口だったとあって良いだろう。黄は自身が世界基督教青年大会に二度参加した経験を青年たちの前で話し、超教派主義の重要性を説いた。戦前に「日本基督教台湾教団」成立の過程において半ば強制的に南北合一させられた長老教会は、戦後の教会再建途上にあって再分裂の危機を迎えていた。黄はかつて自身がアムステルダム大会で聞いたスローガン「United we stand, divided we fall. (一致すれば立つが、分かれては倒れる)」を紹介し、やはり同大会で聞いたオムレツのたとえを用いて、二つの卵はそのままでは二つの目玉焼きにしかないが、割って混ぜ合わせると美味しいオムレツになる、と合同の意義を力説したのである。黄は世界基督教青年大会参加の経験を通して超教派運動の力を強く実感しており、台湾で唯一の超教派的組織といえる台北 YMCA に大きな期待を寄せていた⁽³³⁾。果たして、黄彰輝の夏季学校での呼びかけは青年たちを奮い立たせ、「南北合一」を目的とする TKC への設立へと即つながっていったのである。

ここではこれ以上、TKC の詳細や TKC 発足後の台北 YMCA との関係について論じる紙面的余裕はないが、夏季学校関係者 143 名が南北合一を希望する声明書に署名を添えて南北台湾長老教会両大会に提出したこと、夏季学校開催中の 7 月 20 日に、会長の黄武東（南部大会副議長）、黄彰輝、鍾啓安らを含む 13 名の教職者によって「台湾基督教青年団契連盟準備総会」なるものが創設されたこと、その総会記録において、台湾長老教会の各中会代表および南北ミッション代表と並んで、台北 YMCA 幹事鍾啓安も署名をしていることだけ記しておきたい⁽³⁴⁾。

以上のように、1948 年の夏季学校は黄彰輝および鍾啓安を中心として、台北 YMCA と南北教会教職者の協力の下に実現したものであり、結果的に TKC 誕生準備の場にもなったのであるが、なぜパラチャーチである台北 YMCA が長老教会の「青年部」であるかのような働きをし、

新たに創設されようとしている TKC に加わっていたのかについては、若干の疑問が残る。以下、同時期の台北 YMCA が直面していたところの諸問題について、時間軸を若干遡って検討し、最後にこの問いと関連づけて考察を加えてみたい。

「台北基督教青年会」から 「台北市中華基督教青年会」へ（1948年2月）

上述のように、1945年に設立された台北 YMCA は未だどこからも認知されていない YMCA であり、中華民国を代表する基督教青年会である「中華基督教青年会」に繋がる必要があった。それは1948年夏季学校開催からわずか5ヶ月前の1948年2月まで実現していない。

このことについて鍾啓安は、1947年末の中華基督教青年会総主事の梁小初 (S. C. Leung) および北米宣教師 J. C. オリバー (J. C. Oliver) による台湾訪問の際、その報告文書に掲載した「台湾における YMCA 略史 ("An outline of the history of the Y.M.C.A. in Taiwan")」において、1945年当初の台北 YMCA の設立が中華基督教青年会と無関係になされたことを以下のように弁明している⁽³⁵⁾。

……日本の植民地支配が終わったことは、我々に歴史の転換と真の信仰の自由をもたらした。我々が永いこと望んでいた Y.M.C.A. を組織する機会が、ようやく到来したのである。我々はそのことを、神への感謝と喜びとをもって受け止めるものである。

しかし、あまりにも喜びが大きかったので、中華 Y.M.C.A. 全国協会の委員が我々を訪問する以前に会の組織を開始してしまったのである。実際、中国〔中華民国〕政府と軍隊とがこの島を接収する以前に、活動を開始したのである。このことは、我々が同様の熱心さをもって全国協会委員の方々をお迎えするという以外の何ものをも意味していない。(原文英語、引用者

による翻訳)

この文章がどこまで真意によるものであるかについてはさらなる検討を要するところであるが、いずれにしても、1945年10月に設立された台北YMCAが、1948年2月に中華YMCAに加入を果たすまでに2年以上の時間を要したというのは、当時の台湾と中国大陆との断絶のありようを物語っている。

台北YMCAが中華YMCAに加入した経緯を記すと、鍾啓安は1947年1月、日本YMCA同盟総主事の斉藤惣一から以前手渡されていた名刺を頼りに、北米YMCA中国派遣宣教師のライマン・フーバー(Lyman Hoover)に書信をしたため、台北YMCAの状況を説明、全国協会からの指導を請うている。その書信が梁小初の手に渡り、台湾と上海の間に初めて連絡が生じたのである⁽³⁶⁾。同年9月、鍾啓安は共産党政権成立以前の中国大陆において最後の一回となった、杭州での全国青年会専任主事の大会に招かれて参加、11月には北米宣教師のオリン・マギル(Orin Magill)およびアール・バックレイ(Earle Buckley)が、さらに同月全国協会副総主事の沈志中が、非正式に台湾を視察訪問し、12月の梁小初およびJ. C. オリバーによる正式訪問を経て、翌1948年2月に全国協会理事の満場一致を得て台北YMCAは正式に中華YMCAへの加入を承認された。その際に、名称を「台北市中華基督教青年会」と改めたのである。これは、台湾人によるYMCA運動が史上初めて正式な認知を受けたという点において、極めて重要な出来事であった。

初期台北YMCAの活動と「国語礼拝」

以上のように台北YMCAは、若干の時間はかかったものの「中華」

YMCA の一部となり、両者は 1949 年の共産党政権成立まで密接に連携していくこととなった。上海を中心とする「中華基督教」に対する当時の台湾キリスト教界の関心は、YMCA 以外でも大方において肯定的であった。『教会公報』紙上に「中華基督教会とは何か？」と題する記事が掲載されたように、台湾長老教会も中華基督教会を連携すべき相手として意識していたようである⁽³⁷⁾。それとは対照的に、台湾に入ってきた大陸出身のキリスト教徒との出会いは、台北 YMCA および台湾長老教会双方において、摩擦の経験として記憶されることとなった。

上述のように、台北 YMCA が 1946 年に元明石町教会建物を YMCA 会館として使用するようになって以降、もっとも初期に開始された活動の一つは、大陸出身で台湾語を解さないキリスト教徒に対するフォローアップとしての「国語礼拝」であった。台北 YMCA 関係者がその準備にあたったこともあり、台北 YMCA 側はこれを自分たちの活動の一部ととらえていたが、「台北基督徒礼拝堂」や「信友堂」として発展していった大陸出身者教会側の歴史叙述においては、それはあくまでも YMCA 会館のスペースを借用しての「許昌街国語礼拝堂」であった、台北 YMCA に参加していたとの認識は示されていない⁽³⁸⁾。

1946 年当初の「国語礼拝」には、たとえば共産党政権以前の上海にあった三長老教会（滬南清心堂、滬北鴻德堂、虹口閘北堂）をルーツとする一群のキリスト教徒がおり、彼らは後に「信友堂」として結実していった。これらの信者たちの中には政府の高官が含まれており、非常に信仰熱心で、ともすれば YMCA を乗っ取るほどの勢いだったという⁽³⁹⁾。そこで危機を感じた鍾啓安の斡旋により、1947 年 6 月、中山北路の元台北幸町教会（現済南教会）に礼拝場所を移すこととなり、「台北市国語礼拝堂」が設立されることとなった⁽⁴⁰⁾。

それ以前に、「国語礼拝」では、1947 年より呉勇（1920-2005）を中心とする一世代若い大陸出身のキリスト教徒が、青年向けの日曜学校（主

日学)を日曜礼拝の一時間前に行っていたが、この一群は「国語礼拝」が済南教会に移った後も YMCA の会堂に残り、「青年団契」(「青年会」の意)の名称のもと日曜礼拝を開始した⁽⁴¹⁾。1949 年の共産党政権成立以降、大多数の大陸出身者が台湾へ流れ込んだこともあり、1952 年には毎回の礼拝出席者が 400 名を超えるようになったという⁽⁴²⁾。そのため、1953 年には南京東路、その後の数年間で永和、七張、民生東路に礼拝堂を分設、最終的には 1971 年の許昌街礼拝堂取り壊しに伴い、「青年団契」は林森南路に移ることになった。

『40 年史』によれば、呉勇率いる「青年団契」は、毎週日曜日晚の青年伝道集会、福音伝道、定期的な監獄伝道、聖書研究、ライ病院伝道、貧民救済運動、救済活動などの多様な活動を展開しており、台湾出身の YMCA 関係者もそれに協力する形で参加、その状態が 1948 年から 1959 年初期まで続いたという⁽⁴³⁾。呉勇は大陸出身者としては例外的に台北 YMCA との良好な関係を保っていたらしく、1956 年および 1957 年には理事にも選ばれている⁽⁴⁴⁾。この時期の台北 YMCA はいずれの活動も少人数であり⁽⁴⁵⁾、おそらく、台湾出身者によって企画される YMCA の活動よりも盛んだった「青年団契」の活動に便乗していたのであろう。

とはいえ、後述するように、台北 YMCA における台湾出身者と大陸出身者の間には常に緊張関係があった。その起点となったのは 1947 年に勃発した二・二八事件である⁽⁴⁶⁾。台北 YMCA は、初代理事長の林茂生と理事の徐春卿を二・二八事件で失った。一方、呉勇ら大陸出身者にとって、二・二八事件は自らが暴徒に襲撃されるかもしれない生命の危機に見舞われた事件として記憶された事件である⁽⁴⁷⁾。二・二八事件とそれに続く白色テロの恐怖の中で、「本省人」と「外省人」の溝が深まる社会状況が、YMCA における両者の相互理解を困難にしたのは、当然の経緯であった。

大陸出身者と台湾出身者との摩擦

1947 年末の梁小初およびオリバー訪台の際、両者は台北 YMCA では標準中国語を使用することが望ましいと述べている⁽⁴⁸⁾。これは、戦後直後の台北 YMCA において、関係者は基本的に台湾語（閩南語）を用いており、必要に応じて若干標準中国語を使用している状態であったためである⁽⁴⁹⁾。当然、台湾語を解さない大陸出身者が YMCA の活動に参加することは困難だったと思われ、会員の投票によって選ばれる理事も、ほぼ全員が「本省人」で占められていた。大陸出身者では、湖北省出身のキリスト者で、台湾銀行理事長をつとめた瞿荆洲が、1948 年という早い時期から例外的に副理事長、理事、萬華会所委員会主任委員などを歴任している⁽⁵⁰⁾。その他にも、任偉恩⁽⁵¹⁾、林我鋒⁽⁵²⁾、李頌陶⁽⁵³⁾、陳振福⁽⁵⁴⁾ など、少数の大陸出身者が 1950 年代および 60 年代に理事を務めている。大陸出身者が選ばれたのは「同情票」であったと関係者は回顧するが⁽⁵⁵⁾、瞿荆洲は日本留学の経験があり、上述の呉勇は廈門生まれ、林我鋒は閩南漳州育ち、陳振福も廈門育ちであるなど、日本語や台湾語で意思疎通できたために信任を勝ち取った側面もあったと思われる。

そのように、少なくとも理事会レベルはほぼ台湾出身者が独占していた台北 YMCA であったが、1953 年 4 月に世界 YMCA 同盟総主事のポール・リンバート（Paul M. Limbert）が台湾を訪問した際の報告によれば、専任スタッフのうち二名が台湾出身、二名が大陸出身であった⁽⁵⁶⁾。また、かつては大陸への宣教師で、1950 年代前半に台北 YMCA に派遣された北米宣教師のアーノルド夫妻（Roger D. and Eleanor T. Arnold）が 1956 年に記した報告では、会員の半分为台湾出身、半分为大陸出身とされている。しかし、1956 年より専任主事をつとめた李錫鱗の回顧によれば、大陸出身者に対する差別は特になかったものの、彼

らは常に少数派であったという。これは筆者の推測であるが、宣教師はおそらく「青年団契」を YMCA 活動の一部であると理解し、台湾出身者は、それをあくまでも大陸出身者の活動、すなわち YMCA の活動そのものではないと理解するようになっていたのではないだろうか。

1950 年代初頭に台湾へ渡った元中国派遣欧米宣教師は、一様に台湾を「自由な中国 (Free China)」と理解し、かつての大陸における経験を台湾に当てはめて考えようとする傾向があった。YMCA 宣教師もまた、大陸出身者に対する関心を強く持ち、標準中国語のみを学び、台湾語は重視していなかった⁽⁵⁷⁾。おそらく、そのような宣教師の態度もあって、1950 年代以降になって台湾出身者と大陸出身者との間の摩擦が顕在化した可能性も考えられる⁽⁵⁸⁾。

宣教師が大陸出身者を強く意識したいまひとつの理由として、大陸出身の有力者による YMCA 支援を重視していたことがある。北米宣教師のキース・マイヤー (B. Keith Meyer) によれば、大陸出身の政府要員やビジネス界のリーダーは、かつて大陸において YMCA 運動によって人生を変えられた人々を多く知っており、YMCA に非常な好感を持っていたが故に、台北 YMCA を支援、それが台北 YMCA を成功に導いた理由の一つであった⁽⁵⁹⁾。実際、台北 YMCA の会員を増やすための加入運動の総顧問や総隊長には、台湾省主席呉国楨、俞鴻鈞、嚴家淦、呉三連、呉鉄城、雷法章、黄啓瑞、何応欽、王雲五、高玉樹、黎世芬、李国鼎、黄国書、謝国城、張建邦、游爾堅などの知名度の高い人々が名前を貸したが、その中の多くが大陸出身者だったことは事実である⁽⁶⁰⁾。

いずれにせよ、その後の YMCA は台湾出身者中心の運動に回帰している。この直接の原因は、「青年団契」が上述のように南京東路礼拜堂、永和礼拜堂、林森南路礼拜堂として展開し、許昌街の建物を去っていったことであろう。この点については、1950-60 年代台北 YMCA における大陸出身者参加の実態と合わせ、今後も続けて調査することとしたい。

台北 YMCA の世界における立ち位置の問題

ところで、1948 年 2 月に中華基督教青年会全国協会に正式に加入した台北 YMCA であったが、1949 年 10 月の共産党政権樹立に伴い、中華基督教青年会全国協会と世界同盟との関係は断絶、1950 年には台北 YMCA も中華基督教青年会全国協会から分離することになった⁽⁶¹⁾。これは一時的に台北 YMCA すなわち台湾における YMCA 運動が世界同盟（World Alliance of YMCAs）における正式な地位を失ったことを意味していた。

この事態を受けて、台北 YMCA は世界同盟からの認知を得るべく、1957 年の財団法人取得後⁽⁶²⁾、1958 年 7 月 31 日から 8 月 8 日にかけて開催された世界大会において加入を申請したが、「現段階では決定できない」との理由で却下されている⁽⁶³⁾。その後、台北以外の台湾の都市（台南、台中、高雄）にも YMCA が設立されたことを受けて、1966 年 1 月 15 日、全国協会にあたる「中華民国基督教青年会」が成立、1969 年 7 月に英国ノッティンガムで開催された YMCA 世界同盟世界大会において再度加入を申請し、ようやく台湾（中華民国）単位での正式な加入が認められたのであった。

さらにその後、2000 年 6 月には名称を「中華民国基督教青年会協会」から「台湾基督教青年会協会」に改称、英文の名称も、“The National Council of YMCAs of Republic of China” から “The YMCA of Taiwan” と改称して今日に至っている⁽⁶⁴⁾。

まとめにかえて

1920 年代に開始しながらも正式に認知されずに終わった戦前の台湾

人 YMCA 運動は、戦後直後の 1945 年 10 月、台北 YMCA の設立という形でその精神を結実させた。それは台湾人自身によるパラチャーチ青年キリスト教運動体として設立され、2 年半後に中華 YMCA へ加入したことによって、台湾史上初めての、世界 YMCA と連動するところの正式な YMCA 組織となった。一方で台北 YMCA 幹事の鍾啓安は南北台湾長老教会と連携しながら大規模な青年夏季学校を成功させ、長老教会独自の青年会事業である TKC の発足に台北 YMCA 幹事として深く関わった。黄彰輝と鍾啓安が青年事業において意気投合した経緯があるとはいえ、世界 YMCA と連動するパラチャーチの台北 YMCA が、なぜ 1948 年にいたって台湾長老教会主導の TKC 誕生にそこまで深く関わる必要があったのだろうか。

この問いに答えるには、今後もさらなる資料調査とより多方面からの検討が必要とされるところであるが、ここでは差し当たって、戦後の台北 YMCA において台湾出身者の優位性が絶対ではなかったという点を指摘したい。

YMCA 運動の特色はその国家的・民族的・教派的越境性にあり、台北 YMCA も、理念的には戦前からの歴史を有する台湾長老教会関係者のみならず、戦後台湾に入ってきた、諸教派に属する大陸出身のキリスト教徒が共に参与することを許されているはずの運動であった。台北 YMCA は結果的には台湾人主流の運動として 1950 年代以降も展開していくことになったが、「国語礼拝」や「青年団契」には、台北 YMCA 開始当初より台湾人の予想をはるかに超える人数の大陸出身のキリスト教徒が毎週礼拝に出席していた。青年団契の活動には台湾出身者も参加し、少数ではあるが大陸出身者も台北 YMCA の理事に迎えられていた。さらに中国大陆での宣教経験を有する米国人宣教師は、台北 YMCA では台湾語よりは中国語を使用すべきであると指導していた。終戦直後に台湾人主体の運動として開始していたとはいえ、大義名分上

は大陸出身者にも開かれている台北 YMCA という場が、激動する台湾の政治的文脈において台湾人主体であり続けることのできる保証はなかった。

それに対し、台湾長老教会は日本統治期を通じて台湾人信徒の言語的かつ文化的アイデンティティの牙城であったという点において、ほとんどの大陸出身者にとって入り込めない空間であった。台湾長老教会主導の TKC に台北 YMCA が積極的に参与することは、台湾長老教会から完全に独立した弱小なパラチャーチとして活動するよりも、組織における台湾人の自律性を保つ上では得策だとの思惑は多かれ少なかれあっただろう。このように考えると、なぜ台北以外の都市ではパラチャーチとしての YMCA が 1950 年代半ばまで誕生しなかったのかについても、少なくとも部分的には説明できるように思われる。YMCA の台湾における発展が、このように戦後もかなり遅い時期まで実現しなかったことによって、台湾長老教会 TKC が YMCA を代替するようになった側面があるのではないか、という推測も可能である。

最後に、台北 YMCA および 1950 年代以降の中華民國台湾 YMCA が台湾出身者主導の組織として展開され、最終的には中華民國 YMCA として世界同盟への加入を果たしたことは、いずれも条件が少し異なっていれば異なる結果になり得たという点も指摘しておきたい。前者は国民党軍および行政長官の台湾上陸以前に設立されたために、結果的に台湾出身者が組織の主導権を握ることになった。仮に中華基督教青年会の正式な認知を得ることを優先して、大陸からの視察団や関係者を迎えた上で設立していたならば、大陸出身者が会の主導権を握ることになった可能性はあるだろう。また、後者に関しては、中華民國 YMCA は、中華民國がまだ国際的に認知されていた 1960 年代に世界協会への加入を申請したために承認されたが、仮に加入申請が 1972 年以降だったならば、台湾の国連加入問題同様、事態は著しく困難になっていたであろう。

台湾における YMCA 運動の歴史は、このように戦前・戦後いずれにおいても、台湾島内にあって自らの自律性を求める台湾人キリスト教青年たちが、外来政権による支配の縛りを超えて世界的運動と連動しようとする希求の足跡であるとも解釈できよう。

注

- (1) 「パラチャーチ (Para-church)」とは、教会形成を目指さず、教派教会を横断して共通のキリスト教的な目的に向かって活動する準教會的組織あるいは運動のことを指す。
- (2) 例えば、1920 年代の中華 YMCA 総幹事余日章は、当時の中国における国家主義のうねりに応えて、YMCA の活動を「救国」「愛国」と結びつけることに尽力した (Wang, Peter Cheng-main. "A Patriotic Christian Leader in Changing China—Yu Rizhang in the Turbulent 1920s," in C. X. George Wei and Xiaoyuan Liu eds, *Chinese Nationalism in Perspective*, Westport, Conn. & London: Greenwood Press, 2001)。韓国 YMCA、とりわけ在日本韓国 YMCA が「独立運動の拠点」であったことについては、もはや周知の感があるが (例えば在日本韓国 YMCA ホームページを参照)、近年の実証的研究としては、李致萬 (イ・チマン) 「三・一運動の胎動・準備過程におけるキリスト者の役割」『聖学院大学総合研究所 紀要』53 号、2012 年 3 月、144-167 頁、がある。
- (3) 高井ヘラー由紀「日本植民地統治期の台湾 YMCA 運動史論」『紀要』明治学院大学キリスト教研究所 45 号、2012 年 12 月、71-118 頁。
- (4) 林朝榮「青年與教會的關係」、『連盟報』第 2 号、1933 年 7 月 7 日。
- (5) この点に関しては、特に 1947 年末に台北 YMCA を視察した中華基督教青年会総主事梁小初および北米 YMCA 宣教師 J. C. オリバーの報告が参考になる。この報告書には、1910 年以前に始まっていた台北医学専門学校 YMCA の活動が当局の圧力によって活動を継続することができず、戦前の台湾人 YMCA

戦後直後の台湾における YMCA 運動

運動全般についても、当局が公式の組織として活動することを許可しなかったと述べられている。 (“Report of Trip to Formosa (Taiwan) Cities: Taipei, Tsanswe[sic], Tainan and Takao, December 9-18, 1947,” by S. C. Leung and J. C. Oliver, Taiwan Box 3: Taipei, Formosa 1916-1952, Records of YMCA international work in Japan. Kautz Family YMCA Archives, University of Minnesota Libraries. 以下, 「梁・オリバー報告書」)

- (6) 一次資料として『台北中華基督教青年会成立十週年』1955年、先行研究として、鍾啓安編著『台北市中華基督教青年会 40 年史』1985年（以下、『40 年史』）、および陳金興編『彰化基督教青年会 30 週年紀念特刊』2012年、さらに、陳金興「基督教青年会 (YMCA) 的「変」與「不変」」『書写台湾第三部門史 I』巨流図書公司、2014年、を参照。
- (7) 以下、「梁・オリバー報告書」および『台北中華基督教青年会成立十週年』を参照。
- (8) 茶業で豪商となったキリスト教徒李春生 (1838-1924) の曾孫。戦前に上海およびドイツに留学、帰台後は薬物研究の専門家として総督府中央研究所につとめた。林茂生や杜聰明 (1893-1986、台湾人初の医学博士) に次ぐ、戦後直後の台湾を代表するエリートであった。
- (9) 戦前の台湾を代表する南部出身の弁護士。台南太平境教会長老、台南長老教中学校・女学校、ハンセン病収容所楽生園の理事および監事を歴任し、戦後は北部で開業。南部教会および北部教会双方から人望が厚かった (『教会公報』709号、1948年1月)。
- (10) 戦前の台湾人 YMCA 運動については、高井ヘラー (2012) を参照。
- (11) 戦前の林茂生については、駒込武『世界史のなかの台湾植民地支配—台南長老教中学校からの視座』岩波書店、2015年10月、を参照。
- (12) 林和引は1930年代に台南神学院で学んだ後、早稲田高等学校に留学し、日本神学校を経て日本 YMCA 同盟幹事として働いていた。学生時代には東京台湾 YMCA に参加し役員も務めている。また、戦前の一時期台湾 YMCA の主事をつとめた経緯もあり、台湾 YMCA 主事を永くつとめた近森一貫とも親し

かったという（林明爵インタビュー，2013年5月6日実施）。

- (13) 『40年史』に掲載されている資料によれば，法人登記証書の日付は1957年7月26日であった（429頁）。
- (14) 『40年史』107頁。
- (15) 鍾啓安は台湾神学院卒業後，李春生教会にて伝道，日本神学校に留学後，林和引の後任として日本YMCA同盟幹事とになった（『40年史』111頁）。「梁・オリバー報告書」によれば，鍾は日本YMCA同盟総主事の斉藤惣一の秘書を4年間つとめた後，学生部の主事として働いていたという。また張瑞雄によれば，「日本の多くの基督教青年会の委託を受けて」実質的には幹事の任務を負っていたという。これは第二次世界大戦中，台湾人男子に徴兵の義務がなかったためであると張は説明している（張瑞雄『台湾人の先覚者 黄彰輝』大宮溥訊，教文館，2007年，140-41頁）。この点は林和引も同様であろう。
- (16) 『40年史』112頁
- (17) ただし，この時点で未だ法人登記をしていなかった台北YMCAがどのように旧明石町教会の土地財産を引き継ぐことができたかに関しては，今後もさらなる資料調査によって確認が必要とされるところである。
- (18) 『40年史』113-116頁。
- (19) 同上，113-114頁。
- (20) 以下，塩水YMCAに関しては『教会公報』697号，1947年1月，「Chheng-liân-hōe ê siao-sit（青年会的消息）」参照。
- (21) 7名とも後に塩水教会の長老や執事に就任している。『台湾基督長老教会塩水教会 獻堂典禮紀念手冊』1974年，参照。
- (22) 「Thài-pêng-kéng Chheng-liân-hōe（太平境青年会）」『教会公報』700号，1947年4月。
- (23) 以下，『台湾基督長老教会柳原教会設教85周年紀念特刊』（1983年）63-67頁，参照。
- (24) 同上，55頁。

- (25) 『教会公報』694号, 1946年10月;同702号, 1947年7月。
- (26) 同上, 65頁。
- (27) 夏季学校については以下を参照した。Chiong Khé-an (鍾啓安)「1200 miâ Ki-tok-tô Hā-lēng-hōe (1200名基督徒夏令会)」『教会公報』718号(「夏令会特集号」), 1948年10月; Shoki Coe, *Recollections and Reflections*, New York: Formosan Christians for Self-Determination, 1993 (以下, *Recollections*), 122-124; 張瑞雄前掲書, 142-145頁。
- (28) 以降, 黄彰輝に関しては *Recollections* および張瑞雄前掲書を参照。
- (29) *Recollections*, 112.
- (30) 鍾啓安「1200名基督徒夏令会」。
- (31) 張瑞雄前掲書, 142頁。
- (32) 鍾啓安の報告では上海YMCAからは“Ng Siù-ki”(黄秀基?)博士が招かれたとあり(「1200名のキリスト教徒夏季学校」), 黄彰輝の回想録にはYWCAから女性の講師も招かれていたとある(*Recollections*, 122)。この女性講師は講演報告において「Dr. Miao [「苗」か?]」とだけ言及されている人物と思われる(「Chheng-liân Hā-lēng-hōe, káng-ián iàu-tiám (青年夏令会講演要点)」)。
- (33) *Recollections*, 124. なお, 黄彰輝は1948年の夏季学校より数ヶ月先だって斗六にて行われた南部長老教会大会においても同様の勧めをしたが, その際には南北両教会が戦時下合同させられた経緯を理解していなかったこともあり, 教会関係者から全く受け入れられなかったという(同上, 118.)。
- (34) 「Lâm-pak Háp-it (南北合一)」および「Tiû-pī Uí-oân- hōe (籌備委員会)」, いずれも『教会公報』718号, 1948年10月。
- (35) “Report of Trip to Formosa (Taiwan) Cities.”
- (36) おそらくそのためであると思われるが, 『教会公報』701号(1947年5月)に記載されたある広告では, 既に「台北中華基督教青年会」という名称が使用されている。未だ正式な加入承認以前であったが, それを見込んで「中華基督教青年会」という名称を既に使用していたものと考えられる。

- (37) 「Tiong-hoa Ki-tok Kàu-hōe sī sím-m í h? (中華基督教会是什麼?)」(『教会公報』715号, 1948年7月)。
- (38) 『不滅の燈火』吳勇口述回憶錄, 何曉東整理, 宇宙光出版社, 1993年;『要擴張你帳幕之地(賽54:2)－台北基督教徒南京東路礼拜堂四十週年紀念特刊』1993年;『使人和睦的人有福了－台北基督教徒南京東路礼拜堂五十週年特刊』2003年;『向上看 向前走－台北基督教徒永和礼拜堂四十年週年特刊』2004年,『騰上翅展－中華基督教長老会信友堂擴建感恩紀念集』1989年,などを参照。
- (39) 戦後済南教会の長老を永くつとめた董大成(1916-2008)は, 旧台北日本基督教会建物を共同使用している「国語礼拜」の借用期限が迫っていることに關する台北市政府宛の「申請書」(1951年7月17日付)において, 以下のように述べている。「いわゆる国語礼拜は唐守謙によって創設された。光復当初は台北市許昌街の基督教青年会(YMCA)において礼拜を行っていたが, 民国36年初め, [翁節敦は] 借用道義に背いて, こっそり市政府に赴いて交渉を行い, 借用している青年会の産権を独占すべく, 私人所有として登記変更しようとして企てた。これが青年会前総幹事の鍾啓安の知るところとなり, そのために継続借用を拒否され, 出て行かされたのである。」(原文中国語, 翻訳引用者)この申請書の写しは2016年9月現在, 済南教会が所有している。なお, 資料閲覧のためにご協力いただいた林良信長老および吳娟娟長老にここで謝意を表したい。
- (40) 李錫麟インタビュー, 2013年4月30日;趙榮發インタビュー, 2013年8月9日;「財団法人基督教会台北国語礼拜堂」(<http://church.oursweb.net/church.php?pkey=814151>), 2016年9月26日閲覧。李錫麟氏によれば, 1946-47年頃の台北YMCAの活動は人数も少なく弱小であった。また趙榮發氏によれば, 鍾啓安の機知により国語礼拜が現済南教会に移ったということであるが, 筆者が15年前に済南教会名誉長老林國煌氏に行ったインタビューによれば, 当時の市長で台北YMCAの永久会員でもあった游彌堅も関与していたという。上記ホームページでも, 国語礼拜に出席していた游彌堅の協力があつて現済南教会を使用するようになったとある。既に済南教会では台湾人信徒が礼拜をしてい

戦後直後の台湾における YMCA 運動

たため、設立された国語礼拝堂と教会の使用権をめぐって長年にわたり闘争が続けられた。

- (41) 『不滅的燈火』, 97 頁。なお、『40 年史』によれば、正式名称は「台北基督教青年会青年団契」から 1953 年に「台北基督徒青年会青年団契」と改称され、さらに 1971 年の移転時には「台北基督徒許昌街青年団契」と改称している(202 頁)。
- (42) 『台北青年』第三期, 1951 年 10 月。
- (43) 『40 年史』, 146 頁。
- (44) 『40 年史』, 392-393 頁。
- (45) 李錫麟インタビュー。
- (46) 二・二八事件以降に両者の仲が悪化したことについては、李錫麟インタビュー。
- (47) 『不滅的燈火』, 102-104 頁。
- (48) "Report of Trip to Formosa (Taiwan) Cities".
- (49) 李錫麟インタビュー；趙榮發インタビュー。
- (50) 瞿は戦前東京商科大学に留学し、中華東京基督教青年会の助理幹事でもあった。中原大学設立者の一人でもある。『台北中華基督教青年会成立十周年』；『40 年史』 389-394 頁；『台北青年』 43, 1958 年 9 月 3 日。
- (51) 浙江省寧波出身、上海育ち。学生時代より四川路八仙橋青年会に参加、のちに重慶青年会の理事を務めた。1949 年来台。1962 年より台北 YMCA 理事。(『台北青年』 14-5, 1964 年 5 月 1 日)
- (52) 福建安溪県出身、閩南漳州育ち。南京金陵神学院、1932 年東吳大学卒業後、中華基督教青年会全国教会教育科幹事。光復直後に來台し、日産処理委員專員をつとめ、東吳大学教授となる。台北青年会成立後すぐに協力を申し出る。(『台北青年』 14-6, 1964 年 6 月 1 日)
- (53) 漢口市出身。1964 年当時 59 才。大陸漢口、重慶、上海において青年会幹事の経験あり。(『台北青年』 14-8, 1964 年 8 月 1 日)
- (54) 福建省原籍、神戸出生、廈門育ち。英華書院卒。中学から基督教青年会に参

加。福隆および許昌街の会館の設計にかかわる。『台北青年』14-10,1964年10月1日)

(55) 趙榮発インタビュー。

(56) "Dr. Paul M. Limbert's Newsletter from Taiwan (Formosa): The General Secretary-elect of the World's Alliance, in the course of his visitation of Association Movements around the world, visited Taiwan from April 3-5, 1953." Taiwan Box 3: Taiwan/Formosa, 1953-1971, Records of YMCA international work in Japan. Kautz Family YMCA Archives. University of Minnesota Libraries.

(57) 鍾啓安は北米に送った書信において、標準中国語と台湾語が同様に重要であると主張したが、レニング・スウィートからの返信には、中国での経験からして、欧米宣教師が学ぶべき言語は中国語である思うと記されている (Chung Chi-an to Lenning Sweet, Apr. 22, 1955; Lenning Sweet to Chung Chi-an, no date; Box 3, Taiwan/Formosa ND, 1952-1971, Records of YMCA international work in Japan. Kautz Family YMCA Archives. University of Minnesota Libraries.)。

(58) Roger D. and Eleanor T. Arnold, "Upon leaving world service in Taipei, Taiwan (Formosa)," Feb. 1956. (Taiwan Box 2: Taiwan Correspondence 1956, Records of YMCA international work in Japan. Kautz Family YMCA Archives. University of Minnesota Libraries.) また、上記リンバート報告では、YMCA の場合にはそれほどひどくないが、YWCA (基督教女青年会 Young Women's Christian Association) では台湾人と大陸出身者とが別々の組織を持たざるを得ないほどに、両者の関係が緊張していると述べられている。

(59) "Confidential Program Audit: The YMCA of the Republic of China," attached to the letter from B. Keith Meyer to Gerrit Douwsma, Oct. 30, 1968. Taiwan Box 1, Taiwan Taipei 1957-1958, Records of YMCA

戦後直後の台湾における YMCA 運動

international work in Japan. Kautz Family YMCA Archives. University of Minnesota Libraries.

(60) 『40年史』193頁。

(61) 同上：陳金興（2013）：「在地的台湾 YMCA 運動」『台湾基督教青年雜誌』1995年1月。

(62) 『40年史』205頁。

(63) "Excerpt from Minutes of Executive Committee of the World Alliance, July 31 – August 8, 1958." Taiwan Box 3, Taiwan Aug.- Dec. 1958, Records of YMCA international work in Japan. Kautz Family YMCA Archives. University of Minnesota Libraries.

(64) 『在地的台湾 YMCA 運動』。